

【MD】 ^5

エルモくん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

五年前から世界を恐怖に陥れた今世紀最狂の連続殺人鬼、魔王。およそ一年ほど影を潜めていたが、名探偵の死により再び動き出す。五人の容疑者、秘密組織、謎の男。生き残った君塚 君彦はその謎を解けるのか…。

※何卒暖かい目でご覧ください

※更新はあまり早くないので悪しからず

※原作もしくはアニメの知識が必要な箇所があるので、原作を読むかアニメを観るかどちらかを推奨いたします

目次

第1話	「Dear Lady」	1
第2話	「Sleazy Satan」	10
第3話	「Absolute Crime」	20

第1話「Dear Lady」

一年ぶりに魔王を名乗る人物から警察宛に手紙が送られてきた。魔王という人物は五年ほど前から一般市民を殺害している連続殺人鬼である。魔王と自称するだけあってその殺害方法は常軌を逸していた。被害者はどれも刺殺で殺されており、その後から刃物でズタズタに切り裂かれていた為、死体の損壊が激しいものとなっていた。さらに魔王は不定期的に心臓や肝臓、肺などの特定の臓器を一つずつ奪うという犯行にまで及んでいた。魔王はある程度の冷却期間をおいて犯行を繰り返している為、警察も中々魔王の尻尾を掴めずにいた。「まったく…。何人も人殺してやがるのに手がかり一つ掴めないってどういう事だよ…。」

警部補の加瀬 風靡は過去の書類に目を通しながらパソコンの画面と睨めっこを繰り返していた。魔王の犯行にかかる時間を調べる為である。今回魔王が送ってきた手紙は単なる手紙ではなかった。いわゆる予告状であったのだ。その内容が以下のものである。

『16 June

Dear Lady,
I,msure I, mnot arrested by you. While you are chasing me, I can kill someone. As the panishment, will you dance a fandango? By the way, Do you know a group called "SPES"? I will kill her in the group and take away her pancreas. Please look forward to see her dead body. I, mlook ing forward to meet you, too.
Yours truly

魔王

折角の機会なので、この部分を日本語で書いて送るのも悪くはないでしょう。』

魔王を名乗る人物からの手紙の英文は日本人が書いたものであるかのような筆記体であり、ネイティブ特有のものではなかった。警察内部も悪戯であるとしか考えていなかったが、加瀬は何か裏があると睨み、同じような魔王の手紙を探していた。しかし、どれも魔王本人が書いたとは思えないほど字体がバラバラであった。結局決定的な手がかりが何一つ掴めないまま迎えた事件当日、予告状の通り女性がベッドの上でバラバラに引き裂かれており、彼女の体内からは臍臓が奪われていた。

「えー、それではホームルームはこれで終わりにします。用のない生徒は速やかに下校するように。」

そう言つて帰りのホームルームを終わらせたのは君塚 君彦の担任である松坂 大吾である。松坂は四十代半ばで中肉中背の体型をしており、それがどことなく威厳を漂わせていた。しかし、そんな彼の言葉を聞き流している者が一名いた。その者の名は君塚 君彦。顔も性格も運動神経も普通な彼が唯一持つているもの。それは生まれながらの巻き込まれ体質であること。この体質のせいで彼は今まで無関係かつ予期せぬ出来事に何度も巻き込まれてきた。そんな彼の望みは人生の平穩。ぬるま湯にどっぷりと使ったような、何事もない平穩な日常である。彼は十八年間に渡る苦悩の末、ようやくそれを手に入れる事ができた。しかしその代償として一人の人間の命が奪われる事になった。それは他ならぬ彼の、彼にとっての探偵であった。仮に君彦をワトソンだとするならばその故人は言わばシャーロック・ホームズのような存在であった。

そんな彼の日常は一言で言えば、無気力。望んでいた未来を得たものの失ったものの大きさを実感し、彼は複雑な心境を抱いていた。そんな彼と同じく、放課後の校舎で未だに帰る用意をせず残っている者がいた。それは彼の事をよく知る人物であるが、彼自身はその者を知らなかつた。

「ねえ、あんたが名探偵の君塚 君彦？」

スマホのニュースの記事を読んでいた君彦は視線を画面から声をかけてきた少女に移す。制服を着たその少女は長い黒髪を靡かせており、そのスタイルの良さは制服の上からでもわかるほどである。少女はいきなり君彦の胸ぐらを掴み、質問を投げかける。

「黙ってないで答えなさい。あんたが名探偵、君塚 君彦かって聞いてるの。」

君彦は一度スマホのニュース記事に視線を移し、湧き上がりかけたその感情を押し殺す。彼にとっては大きなターニングポイントとなる三年間であり、探偵というのは彼にとっては忌まわしき単語であった。

「探…偵…。人違いだ。」

「はあ？嘘つかないでよ。」

「嘘じゃない。失礼する。」

彼は本心で語っていた。自分は彼女のようにはなれない。今でも魔王の正体を明らかにできていない。その不甲斐なさや悔しさから彼は探偵を名乗る資格など自分にはないと思っていた。

「待ちなさい。」

少女は君彦を引き止めるといきなり男の口内に手を突っ込んだ。あまりにも突然のことに君彦は動揺を隠せなかった。

「これ以上あたしの質問を無視するなら、あんたのどちんこを触るから。」

少女の脅しに対して君彦が抱いた感情は恐怖ではなく、どうしようもないやるせなさであった。何故何も害を齎していない自分がこんな目に遭わなければならないのか。言わば、彼がよく味わう理不尽さを痛感していた。

君彦は無意識的に少女と距離をとり、彼女の手を口内から吐き出す。

「うわ、最低…。初対面の女の子の指を唾液で濡らすなんて…。ん？これは…。」

「え？っっておい！」

少女は君彦の唾液が付着した手で彼の携帯を見た。そこには先程まで彼が見ていたニュースの記事が載っていた。

「魔王……ほら、こんなの見てるなんてやっぱりあなた名探偵じゃない。ん？」

彼が見ていたニュースの記事は魔王についてのものであった。木嶋は先日の殺人事件の事について事細やかに書かれており、魔王が警察に送った予告状も掲載されていた。少女がそんな君彦の携帯の画面を見ると、彼はあまりの理不尽さに涙を流していた。それを見ても少女は後ろめたさを感じる事なく、彼を軽蔑した眼で見っていた。

「かわいそう……。何の抵抗もできず泣く事しかできないなんて。ああ、そっか。そうだよ。ね。こんな酷いことより本当はこうやって優しく抱きしめられたかったんだよね。」

少女の胸に顔を埋めた君彦はある異変に気づいた。彼女の心臓の音に妙な懐かしさを感じたのだ。その薄気味悪さに君彦は少女と距離を取る。彼の顔は既に汗だくになっていた。

「遊ぶのにそこまで体を張るな。知らない男に胸を貸すな。」

「残念。もう少し遊んであげてもよかったのに。」

少女の今までの行動に対して君彦は文句を言い続ける。そんな君彦に少女は手を差し伸べた。

「夏風 渚。それが私の名前。」

少女こと夏風 渚は君彦に名乗り、手を洗うといきなり彼に質問をしてきた。

「まず、何であんた魔王の記事を見てるの？そんなクズ中のクズの記事、あたしのクラスメイトですら気味悪がつて見ないのに。」

渚の質問に君彦は一瞬言い淀んだ。魔王は四年前から君彦と探偵が追い続けてきた連続殺人鬼であった。しかし、自身を探偵などと称したりすればまた面倒な事に巻き込まれると判断した君彦はその事を秘密にすることにした。そして何より、魔王の正体は未だに解明されていない謎である。過去に君彦と探偵のコンビで事件の解決に尽力したが、証拠を何一つ残さない魔王の方が一枚上手であった。

「気になって調べてただけだよ……。それと、俺に言う事あるんじゃないな

いのか?」

渚はしばらく君彦を見つめ、考え込むとすぐに答えた。

「あたしの手を汚した事を謝ってほしい。」

「俺が謝るの!?!」

「だって人が嫌がることをしたら謝るのは当然でしょ?」

「そのセリフ、そっくりそのままお前に返すが…。：じゃあお前は他人からあんなプレイをされても平気なんだな?」

「そ、それは…。たしかに、ああいう事をされるのは嫌よね普通は…。」

君彦と渚はしばらく話し合いを続けた後、本題に入った。彼女は、渚は人を探していた。その依頼をするために渚は君彦に近づいた。渚の話聞く中で、君彦はある疑問を持った。

「それにしても何故俺が名探偵だ?」

渚はカバンから新聞の記事を取り出した。その記事は全て君彦本人のものであった。

「これに加えて魔王の調査。これで名探偵じゃないならあなたは一体何者なわけ?」

「大袈裟だ。買い被りはよしてくれ…。」

君彦はそう言うとしばらく黙って考え込み、ようやく結論を導き出した。

「人探しか…。探偵にはなれないが助手でいいなら引き受ける。四年前から俺のポジションなんだ。それで?誰を探してるんだ?」

君彦は人探しなら時間がかからないと判断し、渚の依頼を引き受けた。しばらくすると渚は君彦の疑問にこう答えた。

「さあ、それはわからない。あなたにはあたしが探してる人を探してほしいの。」

天国と地獄。人間の作り出した想像上の世界であるが、存在自体はある。人間の想像力の根源は一体どこから湧き出てくるのか。それに対する明確な事実はない。もしかすると、人間の目には見えない何か我々にインスピレーションを与えているのかもしれない。そんな天界の場に一人の男が現れ、豪邸とも呼べるほどの広さを持つ家のインターホンを鳴らした。

「はい。」

インターホンの音を聞いた家の主が扉を開く。この家の主は白髪の少女であった。背は男ほど高くはなく、澄んだ瞳をしていた。

「どうしたの？ 貴方たしかここに来る予定は無かつたはずだけど…。」
「お前に用があつて来た。」

「仕方ないなあ…。いいよ、入つて。」

少女は男に対して意地悪な笑みを浮かべ、男を家にあげた。部屋には銃やナイフなどが置かれてあり、テーブルの上にはピザの入った箱が五つもあつた。

「はあ、お前という奴は…。そんなに食つてると太るぞ。と言うよりも、お前死人だぞ？ 魂が生きているこの場で空腹という現象は無いはずだが…。」

「死んだとしても、美味しいものは食べてたいじゃん。貴方もいる？」
「要らん。別に今日はお前と食事しに来たわけじゃない。」

楽観的な態度で接する少女を男は冷たくあしらう。男はため息をつくと少女に対して一言言い放つた。

「それよりも、死んだというのに随分天気なもんだな。お世辞や皮肉抜きで羨ましいくらいだ。」

「そう言う貴方こそ、まだ生きてるっていうのに随分テンション低いね。あと、お前じゃなくてシエスタだよ。」

「それはコードネームであつてお前の本名ではないだろう。それかもしくは、呼び方を貴様にしてやるか？」

自身をシエスタと称する少女は自身の態度に辟易している男に対してそう言うも、すぐに返答された。

「はあ…。シエスタで呼ぶ気は無いんだね。あ、そうだ。せつかくだからうちに来た理由を教えてください？真面目な貴方が私を襲おうとするはずないし、今日は要請があつて天界に来たわけじゃないんですよ？」

男はシエスタの話聞き、しばらく考え込んでから口を開いた。

「まあ、そうだな。用件としてだが、お前にある男の事を尋ねに来た。それだけだ。そしてその男と言うのが…。他の誰でもない、魔王の事だ。」

第2話 「Sleazy Satan」

男から魔王のことについて尋ねられたシエスタは一瞬動揺するもすぐに平静を取り戻し、答えた。

「あー、何のことかなー？たしかに魔王については調べていたんだけど、結局分からずじまいで…。」

「お前さ、仮説までは立てられていたんでしょ？けど、自身の仮説を確信に変える決定打となる証拠を魔王自身が残さなかったためにお前は未だに確証を持てずにいる。そうじゃないの？」

二人の間に沈黙が続き、シエスタがいつまでもしらを切る腹づもりである事を見越した男はニュースの記事をコピーした紙をシエスタに渡した。

「これは…。」

「SPESの人造人間が殺害されたニュースの記事。奴はそれまで、半人造人間に適合する予定の人間を殺してた。言わば間接的にライオンを殺すようなもん。けど、この記事を調査してもらったら被害者はSPESの人造人間だった。奴はどうとう直接的な殺害方法にシフトチェンジした感じってことだな。それまではライオンの餌となる動物を片っ端から殺していたが、遂にライオンそのものを殺し始めた。これは一体どういう事なのかね…。」

シエスタはニュースの記事を見ると、一分も経たないうちに結論を導き出した。

「もしかしたら、『赤い弾丸』に酷似した武器を製造できたからSPESの撲滅に本腰を入れたのかもね。」

「どういう意味だそりゃ？」

赤い弾丸。それはシエスタの血を含む事で完成される特殊な銃弾の名であり、一度赤い弾丸を打ち込まれれば、SPESの人造人間はマスターであるシエスタに手出しができない。

「三年前、私と助手が魔王を追っている最中に魔王は突然すれ違いざまに私の腕を切りつけてきた。さすがに速すぎて捕まえられなかつ

たけどね。でも、貴方の話を聞いて納得した。私を殺そうと思えばできたはずなのに何故私の腕に切り傷をつけるだけで逃げたのか。」

「なるほどね。その行動すらも、今回の殺人事件を遂行するための下準備でしかなかったってわけか……。イカれてるわ。」

男とシエスタは改めて魔王のSPESに対する只ならぬ執念を感じ取っていた。警察に捕まらずに尚もSPESの人造人間および半人造人間の殺害を繰り返している。

「本当に用意周到だよね。」

「それほど奴にも叶えたい目的があるんじゃないの？とは言え、結局は自分の欲望のために命を奪う奴だからそこは許されないけど。」

シエスタと男は事実を元にしてお互いに推測する。すると男はシエスタの部屋を見渡して一言言い放った。

「あと気になったんだけど、ここ天界だぞ。お前の命を脅かす奴とか現れないから。それなのに武器を持っておく必要があるの？」

「ここが天界だとしても、危機が訪れないって保障はないでしょ？私は死んでも探偵。守るべきものは守らなきゃ。」

シエスタの言葉を聞いた男はため息をつき、その後再び口を開いた。

『守る』とかいう言葉が無闇矢鱈に使うな。お前が今ここで死んだらどうなるかわかる？魂は消滅して、ここにも現世にも存在しなくなる。完全なる無。『次』は無いぞ。」

男の口調に彼なりの心配が隠されている事を理解したシエスタは彼に対して柔和な笑みを浮かべた。

「貴方は優しいんだね。そんな貴方の優しさに免じて、本音を話してあげよう。貴方の言う通り、魔王が誰なのかは仮説の中で目星がついてた。それも死んでからだけど。でも、魔王の事で貴方を巻き込みたくなかった。これは私、いや私達の問題だから。」

「私達…調律者の問題だと？」

男はシエスタの言葉に少々苛立ちながらもそう言い放った。シエスタは男が調律者という存在を知っていることをわかっていたのか、動揺せずに再び男に話しかけた。

「うん。私は成し遂げたい。死んでもこの事件を解決したい。」
「言つとくけど、天界が存在すると言つてもあっち側で死んだら全部
終わりだからね。お前がこれ以上傷つかないために僕がここにいる
と言つても過言じゃないんで。」

男はシエスタの身を案じる姿勢を崩さなかった。この世界の理由
無き悪意によつて殺されたシエスタに同情の念が湧いたのか、或いは
単純に彼女を放っておけないという彼なりの使命感からなのか、それ
は本人にしかわからなかった。

翌日、君彦は渚を待っていた。先日彼女に依頼された人探しを手伝うためである。しかし渚は約束の時間から十五分が経つても現れなかった。すると、「お待たせ」と女性の声が聞こえた。君彦が声の聞こえた方向に目をやると、そこには胸元を強調した服装をした渚が現れた。

「お待たせ……。ってちよつと。彼女でもない同級生をエロい目で見つめるのはやめてほしいんだけど……。」

渚は少々頬を赤らめながら君彦に近づく。君彦は渚を見つけるとそれまで寄りかかっていたガードレールから離れ、彼女に言い放つた。

「……言わせてもらうが、彼氏でもない同級生の男子におっぱいを押し付けてきた奴が何か言ったか？」

「喜んでたくせに。」

君彦は渚に反論され、否定できなかつたことで口をつぐんだ。

「そんな事より夏風、十五分遅れだぞ。時間はちゃんと守れ。」

「女の子は何をするにも準備に時間がかかるの！」

君彦は渚と話しているうちに自然に彼女の胴体に視線を移していた。すると、一人の男が君彦と渚に声をかけてきた。

「おやおや、キミヅカ君とナツナギ君ですか。奇遇ですね。」

「あつ、メイソン先生！」

渚は男を見てそう答える。メイソン先生ことメイソン・ドイルは君彦と渚の学校のALTの教員である。その風貌は貴族階級の老人を彷彿とさせるものであり、どこか知的な雰囲気を感じさせた。

「おいコラ。英語で話さなきゃダメだろ。」

日本語で声をかけた渚に君彦が注意するが、メイソンは笑ってい

た。

「No problem. 今は英語の授業ではありませんので、英語を話す必要はありません。それに私はある程度日本語を喋れますので、心配には及びません。では、私は用があるので失礼。お忙しいところ失礼いたしました。」

メイソンは礼儀正しく振る舞い、君彦と渚の前から去って行った。その挙動は貴族の集うパーティーにいるような紳士のそれであった。「メイソン先生本当良い人よね。君塚とは大違い。…って何？胸見過ぎじゃない？」

「いや、胸じゃなくて鎖骨を観察してただけで…。…ってというか、自然な流れで俺に対して失礼な事を言うな。」

「怖っ！まだ胸見られてた方がマシだったんだけど！」

「お前、その歳の割には良い鎖骨してるよな。」

「鎖骨と年齢の因果関係なんか知らないから！鎖骨評論家みたいなこと言わないで！…ってというか鎖骨評論家って何!？」

君彦は渚と話しているうちに言葉では形容し難い、デジャヴを感じていた。もちろん確証はなかった。ただそのデジャヴは強く残っていた。

「なあ、俺たち前にも一度こんな会話をしてなかったか？」

「してないわよ！…っていうか、こんな会話が前にもあったと思うと地獄なんだけど！」

渚は君彦の言うことを全力で否定しにかかったが、君彦にとってはどうにも自身の内にあるデジャヴを否定する事ができなかった。

すると、二人の前を一人の男が通りがかった。男は急いでおり、二人のことなど眼中にない様子であった。

「強盗です！」

一人の男性の店員の声を聞いた渚は先程通りがかった男を捕まえようとしたが、その男はすでに君彦によって捕まえられていた。

その後、警察によって窃盗の現行犯で男は逮捕された。

「まったく、お前はどこにでもいるな。この街での犯罪の七割にお前が現場にいるんだぞ。それも第一発見者。で？今日は何をやった？

盗みか？殺しか？」

「何もしてません。何なら今窃盗犯を現行犯で捕まえたくらいだ。それに、そういう体質なんですよ俺は。」

その後、一般市民の通報を受けて警察が現れた。突如現れて君彦にそう尋ねて来る風靡に対して君彦本人は事実を交えて反論する。

「どこの漫画の巻き込まれ小学生だお前は。まあいい。だが手間が省けた。アタシに聞きたいことがあるらしいな。何だ？」

風靡にそう尋ねられた君彦は渚の事を話した。自身の心臓が他者のものである事、そのドナーを探している事、心臓の元の持ち主が会いたがっている人物が誰かを知りたい事。全てを聞いた風靡は理解した上で口を開いた。

「…なるほどな。話はわかった。だが、心臓を提供してくれた人物を探してくれって…。アタシら警察は医者じゃないんだぞ。」

「人探しならどっちかと言えば警察の仕事でしょう。」

風靡はあまり積極的ではないものの、君彦は諦めずに頼み込む。しかし、彼女の態度は変わらなかった。

「ドナー探しは専門外だ。それにアタシは忙しいんだ。この後も別荘に顔を出す予定だしな。」

風靡の放った別荘という単語に君彦はすかさず反応する。そこで瞬時に事を察知した君彦は風靡に尋ねた。

「誰かに会いに行かれるんですか？」

「お前もよく知ってる奴だ。だからお前たちがアタシの後をつけて来るなら好きにすればいい。」

「その人耳は良い方ですか？」

「ああ、一度聞いた心臓の音を忘れなくらいにはな…。」

君彦は念押しのような確認を風靡にすると、風靡によって渚とともに刑務所に案内された。

「いいか。二十分だぞ。それ以上はダメだ。」

風靡はそう言うのと、どこかへ去っていった。風靡が去った後、渚がついに口を開いた。

「ねえ、君塚。今更なんだけどあたしたち別荘に行くんじゃないの？」

「ああ、だからここが別荘だぞ。刑務所だからな。」

「だからなんでよ！ログハウス風の建物を想像して来てみたら四方八方鉄筋コンクリートなんですけど！別荘はどこに行ったのよ別荘は！」

「隠語だ隠語。」

「い…淫語…？」

隠語という単語を聞いた瞬間、渚は顔を赤らめて興奮し出した。君彦はそんな渚に対して「なんでちよつと興奮してるんだよ」とお笑い

芸人のようにツツコむ事しかできなかつた。

「どうかどうしてあたしたちはここに来たわけ？」

「俺たちの目的は一番端だ。」

君彦はそう言い、渚と共に刑務所の奥へと向かった。そこには金髪の男性が項垂れて座っていた。西洋人とも見てとれる顔立ち、濁った瞳。その異様な雰囲気は渚の背筋を凍らせた。

「よう、久しぶりだな。コウモリ。」

君彦が男と対面して第一声として放った一言がこれである。言わずもがな、コウモリというのは偽名であり彼のコードネームである。本名は不明であり、彼についての詳しいことは君彦でさえも知らない。君彦とコウモリが出会ったのは四年前、君彦自身にとっては全ての始まりの日であつたからだ。

「よお、随分懐かしいな。名探偵。魔王と闘り合つたつてのは本当か？」

「残念ながら俺は名探偵じゃないけどな。魔王の事は今は話す事じゃない。今日はお前に頼みたい事があつて来た。」

「初めまして！私、夏風 渚と言います！今日は私の心臓の事で相談しに来ました！」

渚はコウモリの前に現れ、全てを話す。それを聞いたコウモリは気怠げな様子を見せながらも口を開いた。

「なるほど。そういう話だったか。要はその心臓の持ち主に心当たりがないか、知りたいわけだ。」

「百キロ先の音すらも聞こえるお前なら容易な話だろ。」

「ああ。しかし、あの日以来随分と変わっちゃまったな。お前も、俺も、魔王も、この世界も。」

すると渚が君彦の服の袖を引っ張つて君彦に声をかけて来た。

「ねえ、一体さつきから何の話をしてるの？」

「こいつはただの人間じゃない。人造人間だ。」

「はあ？何それ？そんなおかしな話が……。」

「あるんだよこの世界には。」

訝しげな表情をする渚に対して君彦は冷静に返答する。そんな二

人の会話を聞いていたコウモリはとっさに耳の部分の触手を放出した。その様子を間近で見ている渚は驚き、君彦の背後に隠れた。

「驚くのも無理はないな。それと、もう心臓の音はお前らがこの部屋に入ってきた時点で特定できている。」

「本当か!? 誰だ!?」

君彦がコウモリに尋ねると、コウモリは触手を使って渚に攻撃した。しかし、触手は渚の前で塵となって滅んだ。その光景を君彦は見ただ事がある。彼にとつての探偵、シエスタの作った「赤い弾丸」の影響だった。それを知った君彦は心臓の持ち主が誰なのかをすぐに理解した。

「俺は目が見えない分、耳で情報を得る。だからてっきりお前とあの探偵が入って来たとはばかり思ってた。」

コウモリの言葉を聞いた君彦は先程のコウモリの「名探偵」という単語を思い出す。あれは自分ではなくシエスタの事を言っていたのか。

「偶然だよ…。」

渚自身も君彦とコウモリの会話からある程度の事は把握できていた。それを現実には当てはめれば今までの自身の言動全てに納得がいく。以前ならばあのような事はしなかった。

君彦が狼狽えながら言葉を放つと、それを聞いた渚が平手打ちで君彦の頬を叩いた。君彦が渚に視線を向けた瞬間、渚は声を荒げた。

「これも心臓の持ち主の影響か…。夏風。」

「違う！ 今のはあたしの意思！ あたしが殴りたかったから殴った！ まだわかんないの!?! この心臓は、あなたに会いたがってたんだよ!!! 死んでもなお一緒にいたいという願いなのにそれを、『偶然』なんて言葉で片付けるな!!! 人の想いを馬鹿にするな!!!」

渚がそう言い終えた瞬間、君彦は渚を抱きしめた。君彦は喉から出かかっている言葉を無理矢理吐き出した。

「そこにいるのか…。実はお前に言いたいことが山ほどあったんだ。何を先に死んでやがる…。馬鹿…!」

コウモリとの面会時間が過ぎた後、警察署を後にした君彦は渚に向

かつて一言言った。

「その心臓はあいつのものだが、夏凧は夏凧の人生を生きていいんだからな。」

君彦の言葉を聞いた渚は涙ながらに首を縦に振った。これで問題が解決した。かのように思われた。君彦は左側にあるビルの屋上から光が反射しているのを目撃した。怪訝な表情をしつつも彼はズボンのポケットに手を突っ込んだ。すると、そこには一枚の紙切れが入っていた。それは手紙でこう書かれてあった。

『Sleazy Satan

Adieu.

魔王』

本能で身の危険を即座に感じ取った君彦は渚に覆い被さるように倒れた。

「ちよつと…い…何するのよ重たいじゃない!…つて…え?」

渚が上を向くと、そこには左腕に短刀のナイフが刺さった君彦の姿があった。

第3話 「Absolute Crime」

渚は君彦の傷の手当てをしてもらうために病院へ行き、二人は傷の手当てという用を済ませるとそのまま病院を後にした。

「…さつきはありがと。」

渚は頬を赤らめながら君彦に感謝の言葉を述べた。君彦が庇っていなければ自分は死んでいたかもしれない。その未来は戦闘の経験がほとんどない彼女にも見えていた。

「礼を言われる筋合いはない。たまたま近くにいたから守った。ただそれだけだ。」

君彦はそう言いつつ、魔王の行動を不審に思っていた。自分自身はシエスタのように特別強いわけでもない。殺す事ならいつでもできたはず。そう考えると、標的は必然的に夏凧となる。だが、SPESでもない彼女を狙った理由は何だったのか。前もそうであった。SPESでもないシエスタを狙い、傷をつけた。たったそれだけで終わった。あの行動の裏に隠された目的は何だったのか。

君彦がそんな事を考えていると、派手な見た目の少女が話しかけてきた。少女は二人よりも背丈が低く、見た目も幼い。また髪は白と桃色と黒が混ざった、メッシュに近い髪であり、左目には眼帯が付いている。

「あの、探偵さんですか？探偵さんに解決してほしいことがあるんですけど…。」

一方、天界で地上の様子を見ていた男は再びシエスタの前に現れた。

「どうしたの？またあっちで何かあった？」

「魔王が動き出した。僕もいざれ現世に向かうことになるだろうね。その時にやっておきたい事がある。」

男がそう言うと、シエスタは彼の顔を覗き込んだ。男はひどく思い詰めた顔をしており、彼女が何をしようとするか今の彼には上の空の反応をするように思えた。

「どうしたの？」

「魔王は何故夏風 渚を狙ったのかわかって。SPESを狙うのが目的ではなかったんじゃないや？いや、そうじゃないなら話は振り出しに…。」

そんな男の疑問にシエスタは「実は」と口を開き、その後彼に全ての真相を伝えた。事態を知った男は動揺もしなければ、表情を一つも変えなかった。

「なるほどねえ。まあ、ある程度は理解した。じゃあ僕は僕のすべき事をしてくる。」

「まさか、魔王と戦ったりはしないよね？」

「魔王の問題はお前達の世界の問題。僕の用件はそれとは別。あ、それと何の用もなく勝手に現世に行ったりするなよ。」

男はそう言うと、ドアを出現させてそのまま天界から姿を消した。
男の背を見たシエスタは微笑んだ。

一方、現世では君彦と渚が少女から依頼の詳しい内容を聞いてい

た。彼女の名前は斎川 唯。十四歳の中学生でありながらも、国民的アイドルとして活躍している。黒と桃色と白の混ざった髪は長く伸びており、左目には眼帯がついている。そしてその依頼内容というのが時価三十億円にもなるサファイアを盗まれないように護衛してほしいという内容であった。

依頼を受けた翌日、二人は唯の自宅に足を運んだ。彼女の自宅は豪邸の二文字がよく似合うほどの外見、面積を誇っていた。

「なるほどな。だが、どうして警察に相談しなかったんだ？」

「相談しましたが、予告状だけという理由で取り合ってくれませんでした。」

君彦は新聞紙を切り取り、コピーしたような探偵モノのフィクションで登場しがちな予告状を手放すと唯に次の質問をした。

「お前のところのボディガードは？」

「彼らは当日はここを守れません。私のファンなので。」

「今すぐ仕事辞めろ！」

おおよその事情を理解した君彦は唯に次の疑問を投げかけた。

「このサファイアを狙っている奴に心当たりは？」

「いえ、ありません…。何せ時価三十億円です。誰が狙っても不思議ではありません…。」

しばらく会話を続けた後、三人はサファイアのある部屋へと向かった。辺りには唯のライブ中の写真が数多く飾られてあった。

その後、渚がトイレへと向かっている間に君彦は魔王が渚を襲った事を再度思い出ししていた。そのうち、君彦は三年前の出来事を思い出す様になった。

三年前、君彦がシエスタのもとで助手として活動していた間に二人はその人物と出会った。他でもない魔王である。魔王の犯行については二人も既に知っていた。故に彼を捕まえる事に、彼の正体を暴く事に執着していた。彼の被っている仮面を壊す。それだけでも二人にとっては十分な成果であった。しかし、現実はその簡単にはいかなかった。

「今おとなしく自首して刑務所に入れば勘弁してあげるよ。そうじゃないと…。あなた、痛い目見るよ?」

シエスタは魔王と対峙するなりいきなり言い放った。君彦も本気のシエスタを見るのは初めてであった。魔王の能力は未知数。故に

数多くの人間が成す術もなく殺されてきた。警察が幾度となく彼の足取りを追ってもたどり着けなかった。それらが魔王の恐ろしさを十分に物語っていた。

「Sir. お心遣い感謝いたします。ですが、それは承諾いたしかねます。」

「どうして?」

「相手が誰であろうと、一度目をつけたら逃がさない。一流の紳士の嗜みです。」

「そう。じゃあ、どうなっても知らないよ。」

シエスタはそう言うと、魔王に向かって銃弾を連射した。しかし、銃弾は全て魔王には当たらず、不発に終わった。魔王は物陰に隠れる事で銃弾を回避した。それが二人にとっては凶であった。二人のいる場所は散乱している場であったため、魔王が戦うにはうってつけの場所であった。すると何かを察知したシエスタが君彦を突き飛ばした。

「助手、離れて!」

君彦が倒れ込み、目を見開くと左腕にナイフの刺さったシエスタが目の前で立っていた。

「シエスタ!」

「速い…。人力であそこまで速くナイフを投擲できるなんて…。」

シエスタは頭脳であり、戦闘においても抜群のセンスを見せていた。彼女にミスは無い。それは現在でもそうであった。彼女はただ不運であったのだ。その不運はシエスタのみならず君彦にも致命的なミスを与えていた。

一つは相手が魔王であった事。そしてもう一つは現在戦っている場所が魔王に有利な場所であった事。

「Excellent. 今のを避けられたのは奇跡ですね。私、ダーツを少々嗜んでいる身でして…。一体次はいくつ命中するでしょうね?」

魔王はそう言うと、激しいナイフの投擲を行った。しかし、シエスタはそれを全て銃弾で撃ち落としてみせた。

「生憎だけど…。一度目にした技は通用しないから。」

シエスタが言い終えた瞬間、君彦は瞬時に察知した。魔王が仮面の下で不気味に笑っていることを。

「気をつけるシエスタ！まだ何かある！」

「…！」

君彦の言葉を聞いたシエスタはすぐさま魔王との距離をさらに取った。しかし、コンマ数秒遅かった。シエスタの頬に魔王のナイフの切り傷がついた。よく見ると、地面に落ちたナイフが宙を舞っていたのだ。

「そんな…。そんな馬鹿な話が…。」

「さすが魔王だね。ここまで手の込んだ事をしてくるなんて…。」

シエスタは銃を構えるも、理解していた。ただ単に銃を乱射するだけでは魔王には太刀打ちできない。魔王に勝つには彼の思考の裏を読む事が必要不可欠である。

「シューベルトの『魔王』、ご存知ですか？」

シエスタが必死に思考を張り巡らせていると、魔王が二人に対して話しかけてきた。唐突に話しかけてきた魔王に対し、二人の緊張が高まる。しかし、魔王はそれに気づきながらも話を続けた。

「あの歌詞は元々ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテという詩人の詩から引用されたのです。魔王は自分の気に入った子供を苦しめ、魔界へと連れて行くのです。それは私も然り。私は貴方達を大変気に入りました。だからこそ…。貴方達を心ゆくまで苦しめたい…！」

魔王の底知れぬ狂気に君彦はただ絶望する事しか出来なかった。人間とは思えぬ悪意、常軌を逸した欲望。魔王の全てが君彦にとつては脅威でしかなかった。その一方でシエスタは未だに銃を構えて立っていた。どれだけ敗色が濃厚であろうと絶対に魔王の正体を暴く。その執念が魔王への恐怖を薙ぎ払った。すると、魔王は事前に準備していたロープを使って建物の屋上まで登り、二人を見下した。よほど戦いに集中していたのか、シエスタと君彦はようやくパトカーのサイレンの音を耳にした。

「そろそろ現地の警察がやって来る頃ですね。今日のところは一旦引

きましよう。次に会う日を楽しみにしていますよ。」

魔王はそう言う又何らかの方法でどこかへと去って行った。その日の出来事を君彦は一度たりとも忘れはしなかった。

渚は用事を済ませた後、君彦と唯の部屋に戻ろうとしていた。しかし、屋敷が広がったためにどこをどう通れば辿り着くのか彼女にはわからなかった。するとどこからか声が聞こえてきた。男性特有の低

い声である。

「右手へ行けば辿り着きます。」

「そう、ありがと……。」

そう言っただけに声をかけてきたのは唯のボディガードであった。名前は土井 マイケル。彼女がアイドルとして駆け出しであった頃からの古参ファンであり、彼女を守るためにボディガードの職に就いたのである。今回、彼はサファイアの警備を務めたかっと思っていたのだが唯のライブとブッキングしてしまい、やむなく警備を諦めたのだと言う。

「そうですか……。皆さんも色々大変なんですね。先程は失礼いたしました。」

「いえいえ。ああいう反応をされるのは当然です。それにしても、唯には優しいです。ハーフの、それもアメリカの田舎からやってきたワタクシを嫌な顔一つせず、心優しく迎え入れてくれたのですから。」

マイケルの熱い思いを聞いた渚は改めて唯という人間が慈愛に満ち溢れた存在であるかを知った。

しかしその翌日、事件は起きた。そしてそれを皮切りに、ついにある人物も動き出すこととなる。

翌日、男は街中を探索していた。この世界は彼が元々住んでいた世界と同一ではあるものの、彼が探している物は見当たらなかった。

「まったく…。アレが見つからないとまずいなあ…。時間が無い上にあのアホからもうるさいし…。しゃーなしだな。急いで探索して天界に戻るか。そしてあいつとまた会う。よし、これで問題無し。」

男はそう決めると、ペースを上げ血眼で目的の代物を探した。この目的の代物がいずれ世界を揺るがす事になるとはこの男以外誰も知らなかった…。